

秘密の話

五年半前に脳梗塞を発症した夫には左半身片側麻痺という後遺症のほかに「高次脳機能障害」という難しい病名がついた。脳の神経がうまく働かないので理性のコントロールが苦手となりよく泣くしよく怒るようになった。それでも記憶の回路は鮮明で、楽しかったこと、嬉しかったこと、がんばったことなど思い出話に花を咲かせては不自由な身体ではあるが明るく前向きに生活していた。

ある時、今は亡き長兄が元気で帰省しているかのように語り、妻である私に自分の代わりに会いに行ってくれと頼む。しばらく兄の話が続いたかと思ったら、今度は年老いた両親がふたりで暮らしているので、お母さんの好きなスイカを買って届けてほしいと言う。夫の妄想に話を合わせては、兄のこと、両親のことをあたかも実在しているかのように話して夫を安堵させた。しかし夫の妄想はこれだけでは収まらなかった。

ある日夫が「おもしろい夢を見たぞ〜」「どんな夢？」夫はニヤニヤしながら「君に子どもが出来たんじゃ」「え〜!こんな七十過ぎたおばあちゃんに子どもが〜?」内心驚きを隠せなかったが、その日を境に夫はことあるたびに「子どもは元気か?」「腹を冷やしたらいかんぞ」「走るな!転んだらどうするんぞ!」その様子はもはや夢の中の話ではない。現実起こった嬉しい体験そのものに化けた。

「名前は桃子にするけんの!」夫の妄想はひとつひとつが現実味を帯びてくる。「命名札を用意しといてくれ。元気になったら自分が筆で書くけん」「赤飯を配る先をリストアップしとけよ」いつまでたっても膨らまない私のお腹をそっと撫でてみる夫。「動きよるか?」「あっ!今動いたよ!」夫は何とも言えない嬉しそうな笑顔を見せた。約六カ月夫は新しい命の誕生を待ちわびながら、七十八歳の誕生日前夜に静かに息を引き取った。夢と現実のはざままで確かに夫は最高の愛顔を残して永遠の旅路へひとり旅立った。